尿道狭窄症の診断から防衛医大を受診するまでの記録

私は子供の時から尿の勢いが悪く尿を出しきるのに時間がかかることで不快な思いをしていましたが、それは個人の体質的なものだと子供の頃から思っており、諦めていました。また小学生の頃では、年が11才から12才頃だと思いますが、排尿する時に非常に激しい痛みがあり、出血して下着に血が付いていることがありました。(そのことで親に相談して病院に行くことはありませんでした。)その後、成長するにつれ、排尿する時の痛みはなくなったのですが、排尿する時の尿の勢いはふつうの人と比べて弱いままでした。ただ尿を出しきるのに時間がかかるというだけで、それは体質的なものだと思っており深く

は思い悩んでいませんでした。その後成人してからは尿が完全に排尿できなくなることはありませんでしたが（時々排尿が困難なときが1～2度ありましたが2～3日後に治っていました。）体の不調の場所が泌尿器というのもあって病院で診てもらうのに抵抗があったと思います。

26才の時に職場にいる時に完全に排尿ができなくなり、（その時は病院の給食室で働いていたのですが）そのまま救急外来での受診となり、入院することになりました。その時に初めて尿道狭窄症と診断されましてその時の治療の処置は、プラスチックの管を尿道から膀胱まで入れ、尿道がもとどおりになるまで、一週間ほど入れたままにしておくという処置でした。

最初の狭窄の治療から再発したことが三度あり

ました。完全に排尿できなくなってから病院に駆け込むことが多かったのですが、治療にあたってくれたお医者様方にたいへんご迷惑をおかけしてしまいました。

治療の主治医には、　　病院の医師にお世話になりまして、尿道再生手術の提案をいただくまで治療を担当していただきました。

その時の治療方法は「レントゲン」（よくわかりません）か何か画像を見ながら経過を観察するのと定期的に尿道を広げる治療（ビニールの管、金属の棒まで）でした。

3ヶ月に一度、半年に一度の間隔で経過の観察、患部の治療を、一年半から二年ぐらい続けていましたが、特に大きく改善したことがなく、お医者様もこのまま同じことを続けていても根本的な完治にならないと思われていたように思います。

その後「このまま一生涯定期メンテナンスのように病院に通って尿道を広げる治療を続けるよりは、完全に治療できる方法を探したほうが良いと思われます」との提案をいただき、さしあたってこの先生ならば、治療できるかもしれないとのことで、「…」

医科大学病院の先生あてに紹介状を書いていただき、その後、受診しました。紹介された先生に診ていただきましたが、「この病院でもできる治療は、それまでのものと同じものしかできません」とのことで、「この病気は治療が難しいですね」と曇った表情をされていました。その時のお話しで「最近この病気でいい成績をあげている治療法がある」「口腔粘膜を利用した手術で、手術できる医師を一人知っている」という話をしていただき、

（尿道狭窄症）

病院で即座に対応していただき、防衛医大病院の泌尿器の医師様宛に

紹介状を書いていただき、平成二十六年　六月頃　防衛医大病院に初めて受診しました。

堀口明男先生による初めての診察の時に尿道狭窄症の手術の説明を受けましたが、「簡単な手術ではなさそう」というので、「口の中の粘膜を採取するのが痛そう」という印象を受けました。

その日の診察で「手術は可能でしょう」とのことで入院と手術の予定を組んでいただきました。

その日の診察の時に、病院施設での画像診察などでしていただいてその時に尿道が相当細くなっているとのことで、今つかっている病院で「膀胱ろう」を作っておいてくださいと指示をいただきました。その後　6月　病院にて「膀胱ろう」を作っていただきました。

（この時は、岐阜県に帰ってきてから5、数日のうちに

完全に排尿ができなくなってしまい、緊急入院という形で
の手術で「膀胱ろう」を作るということになり、主治医
の　　し先生には大変御迷惑おかけしてしまいました。
先生には尿道狭窄症治療中にも大変
尽力してくださり、とても感謝しております。
防衛医大病院に入院するまで約六ヶ月の間「膀胱ろう」
での生活だったのですが、仕事もしていましたし、毎日尿の
バッグの取り外し、装着、入浴時に注意をはらったりして
気苦労する生活でした。膀胱ろうも一ヶ月ごとに病院
で交換していました。

防衛医大受診から入院、手術、退院までの
生活について

平成二十六年十一月の終わり頃、手術のために

防衛医大に入院しました。入院してから、手術、退院まで約、一ヶ月の期間でした。

入院する前に手術の方法についての資料をいただいていましたし、入院してからも全身麻酔の説明を受けていましたので、手術に関しての疑問、不明な所というのはなかったのですが、私個人の不安ということでは、初めての全身麻酔の手術ということで不安はありました。

入院してから一週間は、内服の薬を飲んでいたのと、磁気による画像の診察などでしたが、ここまでで、不快苦痛というものは、何もありませんでした。病院職員の方看護師さんはとても親切で、給食もとてもよいものでした。

手術日の前日に麻酔科医師の説明があり、次の日に手術でした。

手術中は全身麻酔で行われているので、記憶はまるでありませんし、気がついたら「終わりましたよ。おつかれさまでした。」という感じです。それから、ベッドごと病室まで運ばれていき、ここからは病室での生活になりました。

手術をした日から、二日〜三日の間は、体を動かさないでくださいということで、「寝たきり」の状態。寝返りもうたないでくださいということで、正直に言いますと、背中、特に腰が痛い。看護婦さんに腰をさすってもらったりして楽にしてもらっていました。寝たきりの三日間は腰が痛い以外は何も問題ありませんでした。食事は「おもゆ」「ゼリー」などですが、しょうがない、ぜいたくは言えないという感じです。

手術をした日から四日目で、立ち上がるぐらいならかまいません五日目で少しなら歩いてかまいません、という具合で体を動かすことでは、不満はなくなっていきました。手術

した箇所は、痛みがまったくなく、退院したその後になってもまったく不快感はありません。

体が自由に動かせるようになってからは、「口の中が痛い」生活になりました。

口の中の粘膜を採取、移植する手術なので、手術後からは当然口内の一部の粘膜なしで自然に治癒するまで待つということなのですが、とにかく「痛い」、これだけが手術後からは大変でした。

最初の頃は痛すぎて噛めないので「おかゆ」の食事からでした。入院生活でも「痛み止め」でうがい薬のようなものを二種類使っていました。「痛み止め」がきれてくると激痛になり、薬で口の中を洗ってビリビリと痺れてきたら痛くなくなってくるので、一日にかなりこまめに、うがい薬をやってたと思います。

口の中の粘膜が治ってくるにつれて、薬の量も減らし

ていきました。「治りかけ」が一番痛かったと記憶していますが、ただ、口の中の粘膜の回復が早いのには驚きの感想を持ちました。切り取った所は、舌で触ってみたり鏡で見たりしたのですが、切り取ったその日のうちからすごい早さで肉が盛り上がってきていたのでこれはすごいと思いました。

手術から三週間ほど経ってから術後の検査などを行い尿道内の管を抜いていただいて無事にうまくいきましたとのことで、入院から、約一ヶ月をえて退院になりました。

入院中は医師の方々、看護師の方々、病院職員の方々に大変に親切にしていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

退院後の経過について

退院後は尿道が狭窄することは一度もなく、快適に日常生活を送っています。口の中の粘膜採取跡も何も問題ありません。定期的に病院で尿道の検査をすることもなくなり、精神的にずいぶん楽になりました。

膀胱ろうをつけての生活が五ヶ月ほどあったので、自然に排尿できることの気楽さをしみじみと思いました。

これから治療を受ける患者さんへのメッセージ

私は防衛医大病院で尿道狭窄症の手術を受けて、完治した者です。この病気の方は、完全治療が難しかったり、再発をくりかえしたり、治療するにあたり、不安や、精神的、身的苦痛がある方が、多いと思います。私もそうでした。岐阜県で治療を担当していただいた医師様からは、完治をするためには手術するしかないが、大がかりな手術になるかもしれないし、後遺症がのこるかどうかもよくわからないとのことを言われ、不安になったので、手術は無しで治せませんかとお願いもしました。口腔粘膜を利用した手術を受けて、病気が、治った今では、手術を受けて本当によかったと思っています。

現在、病気で苦しんでいる方、これから治療、手術を受ける方、「不安」があるかと思います。

しかし、大丈夫です。私が治療を受けた防衛医大病院には、優秀な医療設備"があり、親切な病院職員の方々、そして腕のいいお医者がおられます。

心配はいりません、きっとうまくいきます。私が健康な体になったように病気でつらい思いをしている方々には、病気を治して、健康な体になり、幸せな生活を送ってほしいと切に願う次第です。

尿道狭窄症は治ります。治しましょう！。